

## 教材のデジタル化，ICTの活用に着目して

谷口峻音<sup>1</sup>・鈴木慎一郎<sup>2</sup>

<sup>1</sup>鳥取大学附属小学校

<sup>2</sup>鳥取大学地域学部

メディアの発展やインターネットの急速な普及は、我々の生活を大きく変えてきている。大人に限らず子供も、動画配信サイトを見ることや、モバイル端末で音楽を屋内、屋外関係なく楽しむことが日常化している。音楽科の教育においても、そのような時代の流れを捉えていかなければならないと考える。本研究では、音楽鑑賞授業における動画の活用について考えた。音楽科の鑑賞授業では、今まで音源のみの鑑賞が主流であるが、動画を積極的に活用していくことがこれからの時代を考える上で重要と捉えている。そこで、検証授業において動画を活用し、「視聴」→「聴」→「視聴」という学習の進め方を考えた。それは、動画と音源のみの鑑賞を交互に行うことで学習を深めるという流れである。検証授業の結果、動画の活用は子供の興味、関心を高め、音源のみだけでは知覚し得ないことを見付けることができるということが分かった。

キーワード：ICT，音楽鑑賞，動画，鑑賞教材

### 1 はじめに

#### 1.1 音楽科の未来へつなぐ授業づくりの視点

##### 1.1.1 音楽科特有の見方・考え方

小学校学習指導要領解説音楽編（2018, p. 10）における、音楽科の見方・考え方は、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。」となっている。これは、様々な音楽活動を経験し、個々の音楽的な感性を育てていくことと捉える。元々個々が持っている感性を、新しい音や音楽との出会いから、音楽を形づく要素やその働きを言語化して捉え、自分の生活など、様々なことに反映させ、自分の感性に還元していくことで、元々の自分の捉え方を変化、発展させていくことができるだろう。図1に示すサイクルを繰り返すスパイラル構造で音楽的な感性を育てていくことが音楽科特有の見方・考え方と捉える。

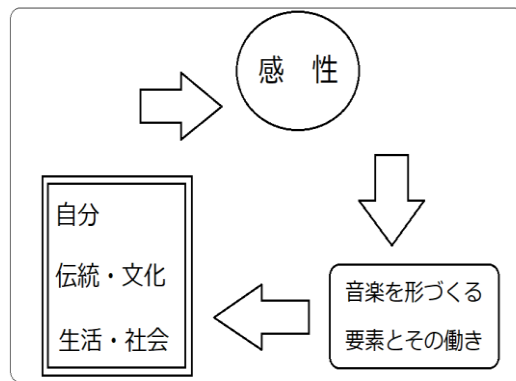


図1 見方・考え方のイメージ

##### 1.1.2 音楽科の提案する学びのプロセス

音楽科は歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞という学習活動があり、内容が異なっているため、それぞれの分野における学びのプロセスを分けて考える必要がある。一昨年、1年次の研究では、音楽づくりについて、音楽を構成する要素をどのように習得していくかについて研究し、昨年の2年次の研究では、歌唱、器楽でのカノンの扱いに着目し、カ

ノンの有用性について研究した。今年度の研究では鑑賞に焦点を当て、鑑賞における学びの視聴覚教材を音楽鑑賞の学習に効果的に取り入れていく。聴覚だけに頼る音楽鑑賞に比べ、視覚も使った音楽鑑賞は知覚できることが格段に増えるため、鑑賞するにあたって、どんなところに注目するかを明確にして実践することが大切と考える。そこで、提案するのが、「視聴→聴→視聴」の流れである。まず、曲全体を視聴させる。しかし、視聴することで得られる多量の情報では、学習で学ばせたいことからずれてしまう可能性がある。そのため、次に学ばせたい内容はピンポイントで内容を伝えるために映像をぬいて音だけで聴かせ、音楽の構造等の理解につなげたい。また、この「聴」の部分は場合として、再度ピンポイントでの「視聴」となることも考えられる。鑑賞して、子供たちが体を動かして真似する場合などは、そのほうが捉えやすくなると考えられるからである。最後の「視聴」は、これまで学んだことをもとに、曲全体を味わって視聴することを目的とする。このようなプロセスで、楽曲全体を味わって鑑賞できるようにしていく。今の子供たちは、テレビ等の視聴を当たり前に行っている世代である。視聴によって音楽に対する興味や関心がより一層高まることが期待できる。

## 1.2 音楽科の未来へつなぐとは

現在、様々な分野でのメディアの発展に加え、インターネットが急速に普及し、人と音楽の関わり方は大きく変化した。私たちは、多様な音楽に即アクセスし、聴いたり、参加したりすることができるようになった。それは大人だけではなく、タブレット端末等の機器を持てば子供にも容易である。現に、子供たちは、日常的に動画投稿サイト等で自分の好きな音楽を視聴することができる。また、コンピュータの発達に伴い、楽器や歌を録音、編集、制作できる。さらには、AIが自動で曲を作ることもできるようになった。そして、それらの音楽は、プロの演奏者でなくても、誰でもつくり、配信することができるものとなった。さらには、多様な関わり方で行なうことができる。昔はホールやサロン等、特定の場所でなければ聴くことができなかった音楽が、今やどこにいても聴き、参加できる。音楽は人の心を打ち、人を感動させ、幸せに導いたり、人と人をつなげたりすることができる。学校での音楽科の学習を通して、音楽と出合い、音楽との関わり方を学び、好きな音楽との関わりや、新たな音楽との出合いによって自分の人生をより豊かなものにつなげていくことが、音楽科における「未来へつなぐ」であると考えられる。

## 2 問題の所在

小学校学習指導要領解説音楽編（p.24）では、「鑑賞の活動は、曲想と音楽の構造との関わりなどについて理解しながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲を全体にわたって味わって聴くものである。」とある。しかし、音楽鑑賞は一時代前とは違い、耳で聴くだけの音楽鑑賞ではなくなってきている。教科書会社の作成する教師用指導書には、指導用のCDだけでなく、鑑賞用のCDも付属している。ところが、視聴覚教材は、一部が音楽授業支援DVDに収録されているが、全てではない。また、鑑賞用のDVDは発売されているものの、あまり普及はしていない。一方、クラシック音楽では、演奏動画の撮影はかなり昔からされている。音源の数は、CD等の音源が圧倒的に多いが、現在ではDVD等の動画も多く出回っている。また、音楽の楽しみ方も、プロモーションビデオを見たりライブ映像を見たりして鑑賞する機会が一般的に普及した。そのため、ICT機器が整備されつつある今、音楽教育における音楽鑑賞の在り方としても、動画の活用を考える必要があると考える。

### 3 研究の目的と方法

#### 3.1 研究の目的

本研究は、音楽鑑賞は聴覚だけではなく、視覚も使った鑑賞のかたちをつくっていく必要があると考え、動画を視聴する音楽鑑賞授業の有効性を探るものである。学習指導要領に記されるように、曲全体を味わって聴くためには、動画を比較的容易に視聴できる現在において、演奏されている様子、奏者の表情等が伝わる動画を活用することは有効だと考える。しかし、実践例が少なく、本当に動画を活用することが有効であるかどうかは定かではない。子供の現状として身近に音楽を視聴できる現在の環境を踏まえ、動画を活用する効果について検証する。

#### 3.2 研究の方法

まず、動画を活用するための環境を整えていく必要があると考える。教室の ICT 化が進みつつある現在、大型モニターやパソコンの活用が以前に比べるとかなり普及し、多くの教師が活用することが増えている。また、音楽の指導書には多くの CD や DVD が付属しており、それらを活用するのだが、ディスクの出し入れ等、音源等を再生するまでの準備にかなり時間を必要とする。その時間を短縮するために、音源等の様々なデータを一か所に集約して活用できるようにする。さらに、提示する内容をパソコンで操作、編集することで、鑑賞の授業では必要となる部分を切り取って活用していく。なお、扱う動画を選ぶ際には、市販されている DVD だけでなく、動画投稿サイトにも目を向け、著作権等に配慮した活用ができるか考えたい。このような教材の集約、教材づくりとしての編集、教材選びを目的に合わせて行っていく。このような教材のデータ化は、来年度には実施される、1人1台タブレット端末を使った学習につなげていくことを想定している。そして、これらの環境を整えたうえで、「視聴→聴→視聴」の学習の流れを取り入れた授業展開を行い、授業のワークシート、振り返り、授業中の言動を分析することで有効であるかを検証する。

### 4 総合考察

#### 4.1 結果

##### 4.1.1 検証授業(1)

「アイネクライネナハトムジーク」を題材に検証授業を行った。「アイネクライネナハトムジーク」は冒頭部分が特に有名であり、今回の実践では、第1楽章全体を鑑賞した。この実践における学習のめあては、音の重なりの変化を感じながら鑑賞するというものである。音の重なり方は、全パートがユニゾンで演奏する場合、旋律がカノンのようにずれて演奏される場合、そして主旋律と伴奏するパートが分かれて演奏する場合の3つを設定した。

このように、聴き取らせたいことが明確になっている場合、どのような編成の演奏を鑑賞させるかが重要になった。しかしながら、この楽曲は、演奏形態も少人数から大人数と多彩であり、弦楽器で演奏されるだけではなく、様々な楽器で演奏されている。この学習で活用する動画は、動画投稿サイトのものを中心に、様々な映像資料から探した。その結果、今回の学習内容に最も合致する、弦楽四重奏で演奏されているものを選択した。その理由は、音の重なり方を感じ取るためには、音を聴くだけではなく、楽器を演奏している動きにも注目させたかったからである。さらに、1パートを演奏するのが1人のため、1つ1つのパートの音と奏者の動きや、音の重なり方を捉えることができると考えた。

実際の実践授業では、動画で見るということは非常に効果的に活用することができた。音の重なり方の3つを聴き取る際には、「視」と「聴」を意識し、音源の1部分を音だけで観賞させる場合と、映像と共に鑑賞させる場合とに分けて鑑賞させた。すると、音声

のみで観賞させたときには、「分からない」と多くの子供が発言していた場が、動画を見せることで、「全員の動きがそろっているから、全員同じように演奏しているはず。」や、「動きがバラバラであるから、同じ旋律を全員が演奏しているわけでも、旋律を追いかけているわけでもない。」といった、映像があるからこそ知り得たことを根拠とする発言が見られたり、映像を見せた途端に、「分かった」というつぶやきをしたりする子供が現れた。このような学習中の子供の様子から、映像を活用することは、曲全体を鑑賞させるためだけでなく、曲を構成している要素を捉えるためにも非常に効果を発揮することが分かった。

#### 4.1.2 検証授業（2）

この検証授業では、「展覧会の絵 キエフの大門」を題材に鑑賞の検証授業を行った。「展覧会の絵」は、元々はピアノ曲であるが、現在耳にするほとんどは大規模なオーケストラが演奏したものである。子供には、オーケストラが演奏する楽器群を弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器の4種類に分類し、曲自体もいくつかのまとまりに分け、それらの部分が、どの楽器が主旋律を演奏しているのか聴き取らせた。また、それとともに、楽曲がどのような構成であるか把握させることで、曲全体を味わって鑑賞できるように設定した。

楽曲の中で決定的に曲想が変化している部分では、それまで主旋律が金管楽器で演奏されていたものが、木管楽器に変わっている。これらを聴き取るときにも、音声だけのものと、動画とを用意した。すると子供は、音声だけの場合では把握しきれなかったことを発見した。それは、どの楽器が演奏しているのか、楽器名を明確にしたことである。オーケストラはとても多くの楽器を使用するため、今回の学習では、楽器群の把握だけできればよいと思っていた。しかし、動画を見ることで、「トロンボーンが演奏している。」や、「クラリネットが出てきた。」という風に、映像でピックアップされている楽器を見ることでどのような楽器で演奏されているのか明確にすることができていた。音声だけでは、「今のところを演奏していた楽器は、何だと思えますか。」というという問いを投げかけたとしても、具体的な楽器名までは明らかにできなかったものが、映像であることで視覚的に効果を発揮した部分であると感じた。

#### 4.2 結果の考察

今回の検証授業では、曲全体を鑑賞するための視聴覚教材と、映像の1部分を切り取り、同じ音源であっても映像のあるものとなないものの2つを用意した。それらの教材を活用し、「視聴」→「聴」→「視聴」の流れを学習に取り入れることで、「聴」では、聴いてみて想像しかできないことを、「視」によって子供が演奏を具体的に捉えることができた（表1）。子供にどの部分の何を捉えさせたいのかを事前に明確にし、それに沿った教材を作り出すことで、視聴覚教材は非常に効果的であった。

検証授業（1）では、音の重なりを聴覚だけでなく、奏者の動きから視覚的に捉えることができた。また、研究授業（2）では、楽器が演奏される様子を見ながら音楽を鑑賞することでどんな楽器で演奏されているか具体的に捉えることができ、動画の活用が非常に効果的であったと言える。音楽の音そのものは聴覚で捉えるものであるが、目で捉えることの重要性があると感じることができた。

また、曲全体を鑑賞するという点に関しては、動画の効果が明確に表れた。「アイネクライネナハトムジーク」は約4分、「展覧会の絵 キエフの大門」はさらに長い約6分間の演奏であった。検証授業の録画ビデオを確認すると、演奏時間の最初から最後まで演奏にほぼ全員が集中して鑑賞することができていた。音声だけの鑑賞であれば、このようにはいかないだろう。そこには、学習で学んだことを全体の鑑賞に生かすことができたこと、鑑賞する際に、視覚をどこに向ければよいか分かることがその要因ではないかと考える。

表 1 発見できた音楽的要素

視聴 (1 回目)	聴	視聴 (2 回目)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・演奏形態</li> <li>・大まかな曲の感じ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音の大小</li> <li>・テンポの早さ</li> <li>・音の高さ</li> <li>・大まかな曲の構成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽器の名前</li> <li>・演奏する動きから旋律の重なり方</li> <li>・演奏者の表情</li> <li>・曲想</li> </ul>

### 4.3 研究のまとめ

#### 4.3.1 結論

両検証授業を通して視聴覚教材を活用し、視覚を使うからこそ発見できる音楽的要素を子供が自発的に見つけることができた。子供のほとんどは、普段クラシック音楽のような音楽を聴いていない。普段慣れ親しんでもいない音楽の要素を学習で問うことは、非常に難しいが、動画を扱うことで楽器の種類や演奏方法を子供は容易に知ることができた。

#### 4.3.2 課題

学習において動画を扱う際に大切にしたいことは、映像のどこに注目させるかということである。映像に映っているものはさまざまであり、子供の注意がそれてしまうようでは意味がない。今回動画を選択する場合でも、そもそも肝心な場面が映っていないことも多くあった。しかし、動画投稿サイトで検索すると、かなりの量の動画を見付けることができ、学習内容に合わせた動画を生かすことができた。ただ、必要な動画を見つけたとしても、学習で学ぶために必要な編集の作業には、かなりの時間を要した。授業の効率化も考えた、編集の仕方や見せ方、そして検証方法には課題が残る。

#### 4.3.3 今後の展望

今後、子供 1 人 1 台のタブレット端末等の ICT 機器が導入されることにより、音楽科の学び方も大きく変化することが予想される。特に、鑑賞や音楽づくりの学習では、ICT 機器を効果的に活用していくことが必須であり、音楽教育の新しい開拓分野になると考えている。要するに、今までの音楽科の学習形態とは違ったものを創造していかなければならない。今回、動画教材を効果的に学習に取り入れることができたことを生かし、今後の新しい学び方につなげていきたい。

### 【文献】

文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領解説 音楽編 東洋館出版社